慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	巻子装の平家物語：「長門切」についての書誌学的考察
Sub Title	A study of "Nagato-kire": fragmentary documents of a different edition of "Heike Monogatari"
Author	佐々木, 孝浩(Sasaki, Takahiro)
Publisher	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
Publication year	2012
Jtitle	斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.47 (2012.) ,p.89- 110
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	別タイトルの表記 : A study of "Nagato-kire": fragmentary documents of a different editon of "Heike Monogatari"
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-20120000-0089

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

巻子装の平家物語
――「長門切」についての書誌学的考察――

佐々木孝浩

はじめに

書物の装訂と、書物に保存される内容との相関関係を考えると、そこにはっきりとした傾向が見えてくるのだが、これに当てはまらない異端的な本に出会うこともある。それらは単なる例外と処理することもできるようでもあるのだが、何か見逃していた重要な情報が秘められているようでもあり、大変気になる存在なのである。その日本の写本における位置や価値を判断するためには、やはり具体的な検討を行うに及くはないであろう。

ここで取り上げたいのは、今日の文学ジャンルでは軍記物語に分類されている、『平家物語』の一異本と認定しうる本文を有する、「長門切」あるいは「平家切」と通称される古筆切の、切断される以前の姿である。この本のことを以下では「長門切本」と呼び、それを切断して生まれた古筆切の「長門切」と区別することとしたい。

一　「長門切」の基礎情報

『源平盛衰記』等の読本系の伝本を含めた、少なからぬ『平家物語』写本において、[1]「長門切本」はとびきり異質な伝本であると言える。その具体的な確認は後回しとして、最初に「長門切」に関する現在までの研究の成果[2]を確認しておきたい。

『平家物語』研究における成果を知るには、大津雄一・日下

力・佐伯真一・櫻井陽子氏編『平家物語大事典』（東京書籍、二〇一〇）の「『平家物語』諸本一覧」における、千明守氏執筆の「平家切」に拠るのが適切であろう。先ずは振仮名を省略して装訂に関する部分を引用しておきたい。

平家物語の異本の断簡。長門切とも呼ばれている。大型の巻子本の断簡で、現在までに五〇葉ほどが報告されている。紙高は三〇センチ前後で、天地に薄墨の墨界を施し、その界間の寸法は二七・一～二七・四センチである。全切同筆で、毎行一八字程度の堂々とゆったりとした筆遣いであり、また料紙は、雲母引きの斐楮交漉紙を使用、断簡化する以前は、かなり立派で豪華な装丁の巻物であったと考えられる。ところどころに朱の合点が見られる。本書が絵巻物であったかどうかは不明である。

安政五年（一八五八）版の『新撰古筆名葉集』の「世尊寺行俊」の項に「平家切、巻物、平家物語、上下横罫アリ」とあるものがこれである。伝称筆者の世尊寺行俊は、藤原行成の一三世の孫にあたり、足利義満が応永八年（一四一〇）に明に送った国書を書くなど、種々の書役を務め、応永一四年四月一〇日に従二位参議で没している。現存する切の多くは代々の古筆家による「行俊卿」の極札が付いている。これまでの研究によれば、本書は世尊寺行俊の筆になるものではなく、鎌倉末期ごろに筆写されたものと考えられる。

長門切の名称は、古筆家伝来の手鑑『藻塩草』（京都国立博物館蔵）の目録に、一〇代古筆了伴が、「行俊、長門切」と書いているのによる。古筆了伴がなぜ本断簡を「長門切」と呼んだのかは不明。

具体的な検討に先立ち、この記述を幾つかの書誌の項目別に整理しておきたい。

【装　訂】　もとは巻子装。絵巻物であったかどうかは不明。

【料　紙】　間隔二七糎余の墨界を有する、紙高三〇糎前後の、雲母引きの斐楮交漉紙。

【残存数】　五〇葉ほど。

【書写者】　古筆の世界では室町初期頃の世尊寺行俊筆とされるが非。

【写　年】　鎌倉末期頃の写。

続いてはこれらについて補足を行ってみたい。

【装訂】については、巻子装の料紙にできる巻皺も確認できるので、巻子装であったことは疑いない。「絵巻物であったかどうかは不明」との記述は、長門切本を絵巻と見る説が存在することの指摘の役割を有しているのである。猶この問題に関しては後述。

【料紙】については、長門切を一〇葉以上も所蔵している鶴見大学図書館の蔵品中で、紙高が最も高いものが三〇・六糎であり、若干の化粧裁ちを想定すると、それよりもやや大きかった可能性がある。一紙の幅については、三井記念美術館蔵の古筆手鑑『たかまつ帖』に所収の切が四六・七糎あって、これが本来の大きさと見てよいであろう。[3] おおよそ三一×四七糎程度の紙を継いで、一紙二二行で書写されたものと考えられるのである。「雲母引き」とあるのは不審で、手鑑の台紙の雲母が切に付着することは良くあるので、そのような例であろうか。「斐楮交漉紙」ともあるが、マイクロスコープで確認した経験ではやはり楮打紙であるようだ。

【残存数】については、國學院大學で行われたシンポジウムにおける、平藤幸氏の「新出長門切数葉の紹介」と題する発表で、これまでの研究で報告されたものに新出の一〇葉を加えた六四葉を整理された上に、模写の可能のある資料も紹介され、同じ折の橋本貴朗氏の発表「「長門切」に見る世尊寺家の書法」でも、書道系の雑誌に掲載された一葉の紹介もなされたので、七〇枚に垂んとする切が確認されている。未知なる手鑑に捺されていたり、個人所蔵のものはまだまだ存在するであろうから、今後も増える可能性は高いものと考えられる。近代になってからの切断でもないのにこれ程多数の切が存在しているということは、作品的に長編であり、かつ切断され始めた時点での残存部分も多かったことが推測されるのである。

【筆写者】については、大部な作品の場合は複数の人物が寄合書をするのが一般的であり、江戸時代に「世尊寺行俊」と鑑定された筆跡の人物による「全切同筆」というのは、書写形式の上からも注目される。しかしながら、この点に関しては、『第一二八回貴重書展 中世の学芸―勅撰集・軍記・目録―』（鶴見大学図書館、二〇一一・六）の「七 異本平家物語 伝世尊寺行俊筆 長門切」解説に、「全文一筆ではなく、数筆の寄合書であるとみられる」との指摘があり、傾聴すべき見解であると考えられる。

【写年】については、池田和臣・小田寛貴氏「続 古筆切の年代測定―加速器質量分析法による炭素14年代測定―」（『中央大学文学部紀要　言語・文学・文化』一〇五、二〇一〇・三）において、池田氏架蔵切を用いての最初の科学的な報告がなされ、シンポジウムにおける池田氏の「長門切の加速器分析法による14C年代測定」と題する講演でも、改めて実験結果が明らかにされている。両者のデータにやや違いがあるが、後者に拠ると、その料紙は科学的な炭素判定の結果、一二七三～一三八〇年の間（特に一二八四年の確立が高い）に刈り取られた植物で漉かれたとのことであり、鎌倉末期頃との従来の推定を補強する材料となっている。

二　「長門切本」が巻子装であること

『平家物語』の研究者でもない稿者が問題としたいのは、「もとは巻子装。絵巻物であったかどうかは不明」という点である。拙稿「勅撰和歌集と巻子装」（『斯道文庫論集』四二、二〇〇八・二）や「絵巻物と絵草紙―挿絵と装訂の関係について―」（同四五、二〇一一・二）でも述べたように、巻子装は日本においては最も権威ある装訂であり、保存される内容を選ぶ傾向があった。『源氏物語』や『伊勢物語』などはいくら著名であっても、原則的に巻子装に記されることはなかったが、挿絵がある場合はそれを優先して巻子装に描かれたのである。

このことからも、長門切本が巻子装であることは重要な意味を有すると考えられる。同本自体の具体的な検討に先立って、『平家物語』の古写本に巻子装のものが他にあるのかどうかを確認しておきたい。

古筆切に目を向けると、巻子装である可能性のあるものとして、「伝慶運筆切」や「伝貞敦親王筆切」、「伝道増筆切」等の存在が報告されている。[4]

伝慶運筆切は、小林強氏作成の一覧[5]に掲出されるもので、村上列氏蔵手鑑『時代不同和歌帖』に捺された物とのことだが、「絵巻詞書か」とされ、巻八・山門御幸部分のものであることの他は詳細不明である。慶運は一三世紀末から一四世紀前半にかけて活躍した歌人であるので、その筆ではなくてもその頃の書写となると、長門切本とも同時期のものとなり、極めて注目すべき存在となる。詳しい報告を待ちたい。

他の二種は伝称通りの筆者であるとしても、室町中後期の写本となる。伝貞敦親王筆切の藤井隆氏御所蔵のものは高さ約二

七・七糎という。最初の紹介では、「巻物皺が少しだが存するので、元巻子本たることは疑ひない」とされ、同切の図版を掲載された『続々国文学古筆切入門』（和泉書院、一九九二）では、「この切が巻物切であるか大四半切か実は断定はできないのであるが、後述するツレの切二枚が一面九行で、それも左右の余白が少なく、中一枚の左端は文字が切れているかいないか微妙な程であったりするので、大四半切とするより巻物切とする方が穏当と考えたのである」と述べておられる。

日本学士院蔵古筆手鑑『群鳥蹟』（東京国立博物館寄託）所収のツレを実見した限りでは、巻皺も認められず、大きさや筆跡、字配りの様子、あるいは楮打紙の紙質からしても、大ぶりな袋綴本の切と考えるほうが自然であるように思われた。

伝道増筆切は、やはり藤井氏が『続々国文学古筆切入門』で紹介されたもので、高さは約三二・七糎、鳥の子の料紙に金砂子を蒔き金泥の下絵もあるものである。最終行が途中で終わり、文章的にも途切れているので、「書き損じとしてこの切れの部分だけ切り取っておかれたのではなかろうか」と推測されている。それはともかく、このような料紙は江戸初前期の絵巻詞書に多いものであり、誰による極めかはっきりしないが、江戸時代のものである可能性も高いのではないだろうか。

この他にも、『思文閣古書資料目録』一二四（一九九一・二）に、「室町中期写か」とされる「平家物語詞書断簡」一軸が掲載されている。高さは四一糎もあり、長さも四米四〇糎も残っており、金泥下絵入鳥の子料紙で、「清水冠者・北国下向等巻七の一部」ながら、「文中脱落錯簡」はあるという。料紙からすると、近世期に近いような気もするが、図版のみでは判断が難しい。

また『弘文荘待賈古書目』一〇（一九三七）にも、伝尊朝親王筆「平家物語潅頂巻」一軸が載る。八寸六分×一尺二寸の紙を二〇葉繋ぎ、全長二丈五尺という。内題と尾題は「平家潅頂巻」とあり、古筆の極札や箱書で尊朝の筆とされ、「足利末期」の写と推定されている。図版を見ても確かに能筆で、室町時代はありそうに見える。途中に絵が挟まっていた痕跡は確認できないようなので、「潅頂巻」だけが独立して書写された可能性もあるが、『平家物語』の巻子本として注目できるものではあろう。

以上の様に、一葉の古筆切を除くと、室町後期以降の例がかろうじて確認できる程度であり、やはり長門切本は極めて特異な存在であることが一層明らかになるのである。これを無理な

く説明するには、絵巻の詞書部分を分割したものと想定するのが最も自然であるように考えられるのである。

この長門切本を絵巻とみるかどうかについての、従来の見解について確認しておきたい。

「長門切」の古筆切界での一般的な名称である「平家切」の名称で、この切を国文学界に始めて本格的に紹介したのは、藤井隆氏「平家物語古本「平家切」について」（『文学・語学』二一、一九六一・九）である。この論文の中で藤井氏は、「平家切は普通の平家物語の諸写本などとは全く比較にならない堂々たる巻子本の断簡なので、絵巻の詞書の部分ではないかと言ふことも考へられるであらうが、文章を諸本と比較するに、却つて諸本になく「平家切」にのみある内容もあり、今の所絵詞として特に略述せられた形跡はなく、又上下の薄墨横罫の存することは、仮名文学系統では、歌合巻・朗詠集巻等の歌書以外には珍しく、殊に絵巻の詞書部分の料紙としては例がないかと思はれるので（勿論、現存する二、三の平家物語絵詞本や源平盛衰記絵巻を始め、平家物語絵巻・義経記絵巻等の軍記系絵巻の料紙に横罫の存するものはない）、平家切も絵巻ではなかつたと考へてよいであらう。実に立派な巻子本である」と述べておられる。

絵詞にしばしば見られる略述が認められないこと、軍記系絵巻の料紙に薄墨横罫の例がないことを理由に、絵巻であったことを否定されているのである。

藤井氏は「平家物語異本「平家切」管見」（『松村博司先生喜寿記念国語国文学論集』右文書院、一九八六）において、新出の切の情報を追加して再説され、「絵巻であったか否かは明らかではないが、文章に省略は全く感ぜられず、諸本にない内容、記述もあること、一五葉七六行の古筆切が出現しているのに、絵の存在がしられないことから、今の所、絵巻ではなかった可能性も大きいように思われる」と述べておられる。いささか表現が弱くなっているようであるが、絵巻の絵の部分が確認されていないことを理由に追加されているのである。

一方、長門切本を絵巻と考えるのが、故小松茂美博士の『古筆学大成二四』（講談社、一九九三）における「伝世尊寺行俊筆　長門切源平盛衰記絵巻詞書」の解説である。ここに、「これらの切には天地に一本ずつ横界を引くが、これは書写を統一するための顧慮である。しかも比較的楷書に近い穏やかな行書に終始している。大型の巻子本であること、しかも、その書写

の字配りが平明であることなどから、これらの断簡が、絵巻の詞書であった、と想像できる」と述べられている。絵巻の詞書と共通する書写形式であることをその理由とされているのであろう。

本文に略述がないことについては、「絵巻づくりの場合は、…すべて本文を大胆に省略して詞をつくり、それを能書が清書するのを常とした。しかし林原美術館蔵「平家物語絵巻」（十二巻、江戸時代初期の制作）のように、『平家物語』の本文のすべてを詞書に記載するものもある」と、かなり後代の例ながら本文を全て記した『平家物語絵巻』の存在を指摘されている。

さらに、「後崇光院の『看聞御記』永享八年（一四六三）五月三十日条から閏五月十三日条によれば。延暦寺の重宝として、「保元絵」と「平治絵」（絵巻）が、各三合の櫃に、五巻ずつ収納して秘蔵されていたと記載する。つまり、『保元物語』『平治物語』をそれぞれ十五巻の巻子本に仕立てたことを知る」と、古記録から大部な軍記系絵巻が制作されていた事実を指摘されて、「かような時代背景から「長門切」の詞書断簡を含む「源平盛衰記絵巻」が、『源平盛衰記』四十八巻のすべてを描く、壮大な絵巻として制作されたと推定する」と結論づけられているのである。

このように否定説も肯定説も共に認められ、定説は存していないのが現状なのである。

三　「長門切本」の大きさと界線の問題

長門切本が絵巻であったかどうかを決めるには、やはり長門切の書物としての特徴を、藤井氏が指摘された点も含めて具体的に確認して、現存する絵巻類[6]との比較を行いつつ、総合的にその可能性を検討する必要があるであろう。

まずはその大きさからである。長門切本の高さは三一糎程度であったと考えられる。この数値は絵巻として相応しいものなのであろうか。

平安時代後期の一二世紀成立とされる、国宝『源氏物語絵巻』（徳川美術館・五島美術館蔵）は二二糎、同『寝覚物語絵巻』（大和文華館蔵）は二五・八糎、重文『葉月物語絵巻』（徳川美術館蔵）も二三・三糎と、伝奇物語の絵巻は相対的に小さかったことが判る。料紙の質や規格と関係するのであろうか。但し同じ時期の成立でも、国宝『信貴山縁起』（朝護孫子寺蔵）は三一・七糎、同『粉河寺縁起』（粉河寺蔵）は三〇・八糎、同『華

厳五十五所絵巻』（東大寺蔵）は三〇糎と、仏教に関連する絵巻は長門切とほぼ同じ大きさを有しているのである。仏教関連のものではないが、国宝『伴大納言絵詞』（出光美術館蔵）も三一・五糎であるのは注目されよう。

長門切に近い鎌倉時代の一三世紀成立のものでは、重文『伊勢物語絵』（和泉市久保惣記念美術館蔵）が二六・八糎と、全盛期の物語絵巻の流れにあるものかやや小ぶりであるが、『西行物語絵巻』（徳川美術館蔵）が三〇・一糎、『住吉物語絵巻』（東京国立博物館蔵）が三〇・四糎、同『長谷雄草紙』（永青文庫蔵）が二九・七糎、『男衾三郎絵詞』（東京国立博物館蔵）が二九・三糎、『小野雪見御幸絵』（東京芸術大学蔵）が二九・一糎と、重文に指定されているこれらの絵巻は高さが皆ほぼ三〇糎前後なのである。

やや性格の異なる、重文『伊勢新名所絵歌合』（神宮徴古館蔵）が三二・三糎で、仏教系の国宝『華厳宗祖師絵伝』（高山寺蔵）が三一・七糎、重文『法然上人絵伝』（増上寺蔵）が三二・八糎、重文『能恵法師絵詞』（広隆寺蔵）が三一・四糎と、僅かに大きいが、問題とするほどの大きさではないであろう。

挙げていけば切りも無いが、鎌倉後期頃の制作や奉納年代の判明するものでも、建治三年（一二七七）の『北野天神縁起絵』（和泉市久保惣記念美術館蔵）が三二・二糎、弘安元年（一二七八）の重文『北野天神縁起絵』（北野天満宮蔵）が三一・二糎、永仁六年（一二九八）重文『北野天神縁起絵』（津田天神蔵）が三二・五糎と、一三世紀後半のものはかなり近しい大きさであることが判る。

ところが一四世紀になると、嘉元三年（一三〇五）の重文『浄土五祖絵伝』（光明寺蔵）が三三・一糎、応長元年（一三一一）の重文『松崎天神縁起』（防府天満宮蔵）が三三・七糎、元応元年（一三一九）の重文『絵柄天神縁起絵』（前田育徳会蔵）が三四・一糎と、やや大きめのものが目立つようである。

この間に紙の製造規格に変化があったのだとすると、長門切本が一三世紀末の成立であることの証拠の一つとなる可能性もあり、興味深い問題であるが、今後総合的な調査をして、変化の実態を確認する必要があろう。

ともかくも、一三世紀頃に制作された絵巻の基本的な大きさが三一、二糎前後であったことは確認できるのであり、その点では長門切本の大きさは該当するのである。

ただし、一三世紀の国宝『当麻曼荼羅縁起』（光明寺蔵）が

五一・六糎と特別大きいのは、料紙の長辺を縦にして用いているので例外的であるとしても、永仁六年（一二九八）の重文『東征絵巻』（唐招提寺蔵）が三七・五糎、正安元年（一二九九）の国宝『一遍上人絵伝』（歓喜光寺・清浄光寺蔵）は絹本で三七・九糎、延慶二年（一三〇九）の『春日権現験記絵』（宮内庁三の丸尚蔵館蔵）も絹本で四一・五糎と、特大絵巻とでも呼ぶべき事例も目立つのである。

こうした大きな事例と関連して特に気になるのは、一三世紀の国宝『平治物語絵詞』（東京国立博物館蔵）が四二・七糎、同じく重文『前九年合戦絵詞』（国立歴史民俗博物館蔵）が三六・六糎、やや成立時期が下るが、貞和三年（一三四七）の重文『後三年合戦絵詞』（東京国立博物館蔵）が四五・七糎と、「合戦絵巻」とも称される軍記関係の絵巻に特大のものが多いことである。

とはいえ、国宝とは別種の一三世紀後半とされる重文『平治物語絵巻』（個人蔵）が三二・三糎、やはり重文とは別の一四世紀前半の『前九年合戦絵詞』（東京国立博物館蔵）が三〇・六糎と、長門切本と近い大きさの合戦絵巻も存在するのであり、長門切本が合戦絵巻としては小さいと見る必用はないものと思われる。

いささか煩多な列挙となってしまったが、以上により、長門切はその大きさの点では、絵巻の詞書である可能性を否定できないことが確認できたものと考える。

しかしながら、絵巻と見ることの最大の障壁は、藤井隆氏の「上下の薄墨横罫の存することは、…殊に絵巻の詞書部分の料紙としては例がないかと思はれる」との指摘であろう。改めてこの問題についても検討してみたい。

絵巻料紙の高さの調査をしつつ確認してみたのだが、平安時代から室町前期頃までの絵巻物には、長門切本のような墨界の事例を見いだせないのは確かである。

藤井氏は『和漢朗詠集』や歌合にそうした例のあることを指摘しておられる。これを補足するならば、朗詠集の例としては、古いものでは藤原定信・伊行筆と考えられている平安後期の戊辰切本（金銀の箔を蒔く）、飛鳥井雅経筆とされてきたが藤原教長筆と考えられる平安末期の長谷切本と金銀切箔切本、平安末期の伝源頼政筆の平等院切本、平安末鎌倉初の伝寂蓮筆の大坂切本、鎌倉初期のやはり伝寂蓮等の雲紙切本等々と、枚挙に暇無い程である。ただし、鎌倉時代以降の世尊寺家歴代を伝称筆者とする朗詠集切は、天地の界線ばかりではなく縦罫もある

ものが多いようである。

歌合では、「類聚歌合」（二十巻本歌合）がなんと言ってもその代表的存在であろうか。鎌倉時代のものには三本以上界線があるものは「本能寺切」本『千五百番歌合』等に確認できるが、天地のみのものは「二十巻本」を模写した伝頼朝筆の「大慈寺切」くらいしか見当たらないようである。

勅撰集も三本以上のものは伝中臣祐春筆の続拾遺集切等の数例あるが、二本のものは金界ではあるが尊円親王筆の風雅集切が見いだせる。[7]

歌学書類では、一二世紀後半頃とされる伝寂蓮筆の奥義抄切（古筆学大成二四所収）と、鎌倉後期頃と考えられる伝二条為定筆『代集』（東京国立博物館蔵）がある。前者は二七・七×三四・七糎の二紙継で、後者は一紙が三一・〇×四九・一糎である。後者は長門切本よりやや横幅が広いが、ほぼ同じ大きさの料紙を使用していて注目できよう。ただしこちらは不要となった書状の紙背を利用している点で異なっている。

このように絵のない巻子装写本では、横界のあることは特別珍しいことではないのであり、その点においては長門切本は絵巻であった可能性が低くなってしまうのである。

四　「長門切本」の書風の問題

『古筆学大成二四』解説の整理するところでは、長門切に付された極札の古いものは古筆家二代了栄（一六〇七～一六七八）のものであるようで、江戸時代の早い頃から分割が始まっていたと考えられる。初代了佐、その息了雪門弟の藤本盛庸（箕山）編で、承応元年（一六五二）自序を有する『明翰鈔』の「行俊」項に「平家物語切」とあるのが、古筆名葉集類に著録された古い事例で、比較的早くから名物切として認定されたことを示している。七代古筆了延（一七〇三～一七七四）編の写本『古筆類葉集』[8]にも「平家切」が見えるが、文政一一年（一八二七）版『古筆名葉集』には掲出されていない。安政五年（一八五八）版『増補新撰古筆名葉集』になって、「平家切　巻物平家物語上下横卦アリ」とやや詳しく説明されており、「平家切」が今問題とする古筆切であることがはっきりするのである。

「長門切」の呼称は、前述の様に、京都国立博物館蔵の国宝古筆手鑑『藻塩草』に附属する、弘化四年（一八四七）に一〇代古筆了伴が記した目録の記載に拠るものであるが、呼称はともかく、伝称筆者としては「世尊寺行俊」でほぼ揺れがない。

高田信敬氏は、「すべての切が世尊寺行俊（?～一四〇七）を伝称筆者とし、古筆切にしばしばおこる伝称筆者のゆれのないのは、相当量の巻子本が組織的に分割されたことを意味するのかもしれない。書写年代については研究者によって認定に差があるけれども、行俊よりは古く、その祖父行尹（一二八六～一三五〇）あたりが時代的にはふさわしい。行俊に擬せられた理由不明、巻子本の段階で行俊の奥書識語の類でもあったものか」（『鶴見大学貴重書展解説図録 古典籍と古筆切』（鶴見大学、一九九四）「一〇七　異本平家物語断簡 長門切」解説）と述べておられる。

池田和臣氏蔵の切が、「住吉社家　津守国冬」との裏書きを有するような事例も存するものの、[9] ともかくもほぼ揺れがなかったことは、長門切の書風が世尊寺流を示していると認定されていたことを示すと考えてよいであろう。

言うまでもなく、世尊寺家は入木道を代表する家柄であり、[10] その事は『増補新撰古筆名葉集』にも、初代行成[11]（15）は三蹟で別になっているが、その孫の三代「世尊寺殿伊房」（1）より四代定実（1）・六代伊行（2）・七代伊経（6）・八代行能（7）・九代経朝（6）・一〇代経尹（2）・その弟定成（5）・一一代行房（5）・一二代行尹（12）・一三代行忠（4）・一四代行俊（4）と、歴代の一二名の名と合計七〇種もの名物切が著録されていることに明らかである。これに勝る人数と切数を誇る家は、歌道家の代表たる御子左家を措いて他に無い。

この様に、世尊寺家の人物が筆者と伝えられる古筆切や典籍類は数多いのであるが、確実に同家の人物の手になる資料となると、これが意外なほどに少ないのである。その確実な例を取り上げて、その書の傾向を把握してから、伝称される資料を含めて書風を纏めてみたい。

一一代行房は、冷泉家時雨亭文庫に「元徳二年七夕御会三首和歌懐紙」が蔵されており、『冷泉家時雨亭叢書三四』（朝日新聞社、一九九六）に影印がある。元徳二年（一三三〇）のものであり、鎌倉末期の世尊寺家の書風を考える上で貴重な資料であると言える。

一三代行忠は行俊の養父であるが、貞和三年（一三四七）成立の重文『後三年合戦絵詞』（東京国立博物館蔵）の下巻を担当していることが、信頼できる末尾の識語により明らかである。[12] また同様の識語により、観応二年（一三五一）成立の重文『慕帰絵詞』（西本願寺蔵）の巻一〇は、行俊実父の伊兼（定成

曽孫）筆であることが確実である。[13]

懐紙は資料としての性格が絵巻の詞書とはかなり異なるが、文字が大きい点では共通していよう。この三者を比較すると、細い線と太い線のめりはりがあり、運筆がなだらかで線に丸みがあり、止めや払いの部分が力強いなどの共通性を認めることができそうである。[14]印象的なのは仮名の「乃」ではないだろうか。基本的に縦長であること、一画目の左払いの線が長目で、先の撥ねがしっかりしており、二画目の入りの横線と、角を九〇度よりやや狭くしてしっかり下ろす縦線とでは、縦線の方が長く、最後の膨らみはしっかり半円を描いて、先を細くして終筆する書き方は、共通性を認めやすいであろう（図版1・2・3）。行房と行忠は、一画目の先端が終筆よりも下にある点でも共通しており、ほぼ同じ高さである伊兼は少しだけ異質とは言える。

図版1
行房懐紙の「乃」
（冷泉家時雨亭叢書 34 より）

図版2
行忠絵巻詞書の「乃」
（日本絵巻大成 15 より）

図版3
伊兼絵巻詞書の「乃」
（続日本絵巻大成 4 より）

こうした特徴を、世尊寺家の人物の書とされるものと比較すると、高田氏が時代的に長門切に相応しいとされる、一二代行尹の筆跡と鑑定されてきた、古筆手鑑『高松帖』（三井記念美術館蔵）や『古筆手鑑』（金沢市立中村記念美術館蔵）等に存する、雲紙の「時代不同歌合切」や、古筆手鑑『文彩帖』（根津美術館蔵）・『鴻池家旧蔵手鑑』（大東急記念文庫蔵）等に見られる、『嘉元百首』の尚侍（一条実経女頊子、後の万秋門院）百首の装飾料紙の懐紙切、あるいは『日本書蹟大鑑六』（講談社、一九七九）には行尹の「真跡資料（推定）」として掲載される、『藻塩草』・『鴻池家旧蔵手鑑』等に見える、「足利尊氏奉納諸社法楽和歌」断簡の「七社切」等に、特徴的な「乃」を確認することができる。

また、『古筆学大成二四』に所収される、伝定成筆「未詳絵巻詞書断簡」や、伝行俊筆「一遍上人絵伝詞書断簡」でも、これに似た「乃」を見いだすことができるのである。

全ての世尊寺家の筆と伝称される古筆切を確認した訳ではないが、ともかくも確実な資料から、以上のような切は少なくとも一四世紀の「世尊寺流」の範疇に入る書風であると考えられそうである。[15]

行房・行尹に書を学んだ青蓮院尊円親王は、文和元年（一三五二）に著した『入木抄』の「一 本朝一体なれども時代に付て筆体分明事」条において、「行成卿が後胤は皆権跡を写来。聊も筆体を不改。但時代にしたがゐて次第にかはりたる様に外儀はみゆれども、其実は全同也。更異風を不交。行能卿より以来今の行忠まで殊同姿也。能々写得たりとは見候也」[16]と述べている。鎌倉初期の行能から行忠まで「同姿」であったと述べていることは、行房・行忠・伊兼や伝行尹筆に共通性が認められることからも納得できるのである。

非常に荒っぽい整理であったが、以上のような世尊寺流の書風の特徴は長門切には認められるのであろうか。その確認を行うには、先に問題になった長門切本が寄合書きである件について、検証しておく必要がある。近い時代の尾州家本『源氏物語』を例に挙げるまでもなく、[17]冊数が多い書物では複数人で分担書写することは一般に行われていたことである。乱暴を承知の上で、書道の素人の目で問題の「乃」や、特徴的な「れ」等の頻出する文字を中心に比較してみると、『古筆学大成二四』所収の二〇葉は次の様に三手に分類できるように思われる。三桁の漢数字は同書中の整理番号、（ ）内の算用数字は『源平盛衰記』

における該当巻数である。

A　一四一（11）

B　一四二（15）

C　一四三（18）・一四四（18）・一四五（27）・一四六（26）・一四七（27）・一四九（28）・一五〇（41）・一五一（41）・一五二（41）・一五三（41）・一五四（42）・一五五（42）・一五六（不明）・一五七（27）・一五八（41）・一五九（42）・一六〇（43）・〔一四八（37）〕

ABのものは極端に数が少なく、バランスが悪いようだが、前半の巻の切は残存数が少ないので致し方ないこととも思われる。巻一一の切は古筆手鑑『披香殿』（川崎市民ミュージアム蔵）にもあり、巻一五のものは田中登氏『平成新修古筆資料集一』（思文閣出版、二〇〇〇）にも見えており、それらを含めて検討しても、この分類は揺るがないものと考えられる。念のためにそれぞれの「乃」を図版に掲げておきたい（図版4・5・6）。

猶、巻一五のツレには、料紙を折紙にした半分の高さで紙背に医書を写した日比野浩信氏蔵のものがあり[18]、他と異なる伝来も想定できて興味深い。同様のものは他に確認されていないが、田中氏蔵のものは中央に横一線の折目が確認でき、この転用と関連するものである可能性がある。猶『古筆学大成』一四二の図版では折目は確認できない。

Cは更に分けることが可能であるかもしれないが、これ以上の分類は稿者の手には負えそうもない。ただし、**C**のグループの中には、ある特徴を共通して有しているものがある。それは一四六・一五六の二葉で、これらには天地の界線とは別に、僅かに高さが狭くまた線が細い天地の界とともに、行分けの罫線までも存しているように見えるのである。本文はこの罫線を無視して書写されているようであり、これらは基本的に本文とは無関係であると考えられる。一四六は巻二六の切であるので、同じ巻の切を確認してみると、古筆手鑑『世々の友』（林原美術館蔵）所収のものや、鶴見大学図書館蔵の一葉（書出し「魂を」の三行）等にもそれが存しているのが確認できる。『総持学園創立80周年記念展示　和歌と物語』（鶴見大学、二〇〇四）の図録解説には、「この断簡のみ紙背に淡墨界あり、その意味不明」との注記が加えられており、図版ではっきりしなかった理由も判るのである。そうなるとどちらの界線が先に施された

のかも問題となろう。先に言及した巻一五紙背の医書に界線は無いので、これとは無関係であることは確かである。些細な問題ではあるが、長門切本の制作の場や方法を解明する手掛りになる可能性もあろうか。

その追求は今後の課題であるが、この特徴がいささか役に立つこともある。一五六は『源平盛衰記』に該当する部分を見いだせないものであるが、他の界線を有する切と同様に巻二六に相当する巻の断簡であると推定できるのである。

ともかくもこの大多数を占める**C**の筆跡こそが、長門切を代表する手跡であり書風であると言えるのである。ただし、**A**
B
Cの三手の「乃」を、先に確認した世尊寺家の人物のそれと比較してみると、最も共通性が高いのは**A**である。**A**は最も世尊寺流らしい書風と言え、**BC**は書流としては共通するものではあるが、**A**とは若干距離があるのであり、やや傍流の手と見なせようか。

長門切の書風について故小松茂美博士は、「定成の「願文」や「和歌懐紙」の書風に酷似するのである。が、子細に吟味すると、若干の相違がある。定成の書風に私淑した近親者か弟子

図版 4
(141) の「乃」
(古筆学大成 24 より)

図版 5
(142) の「乃」
(古筆学大成 24 より)

図版 6
(150) の 3 種の「乃」
(古筆学大成 24 より)

の筆にちがいない」（古筆学大成二四解題）と述べておられる。それは最も枚数の多いCの筆跡を対象としてのことと考えられようか。文中の「願文」は、弘安七年（一二八四）三月一八日の日付がある東京国立博物館蔵『佐渡守平行政願文』のことであり、[19]「和歌懐紙」とは、宮内庁書陵部蔵の後崇光院自筆『看聞御記』紙背に存する、「歳暮同詠冬五十首応製和歌」との端作と、「前石見守藤原定成」との署名のある懐紙のことで、共々図版も掲載されている。

漢文体の願文との比較は難しく、漢字としての「乃」を確認できはするが、Cの数パターンある仮名の「乃」の書きぶりとはあまり似ていない印象である。またこの和歌懐紙は、伏見天皇東宮時代の京極為兼を中心とする、京極派揺籃期の詠作の有り様を伝える貴重な資料として夙に有名な、同記巻五紙背の和歌懐紙草稿群の一つで、複製も刊行されている。[20] 重ね書きなども見られる草書の走り書き的な書きぶりで、行書である長門切との比較は難しい。その上に巻五紙背の懐紙には「乃」字が無いのである。

ところで、池田和臣氏蔵の切の裏書にあった津守国冬筆との鑑定についてであるが、国冬は文永六年（一二六九）に生まれ、元応二年（一三二〇）に没しているので、長門切本の制作推定年代とは一応合致する。それだけではなく、渡部清『影印 日本の書流』（柏書房、一九八二）にも、江戸時代の書流を整理した書物で、国冬が世尊寺流に分類されていることが紹介されており、その筆跡は「歌集の奥書などを見ることができ」、「優れた書とは言いがたいが、ゆったりと落着いた書である。世尊寺定成の書などといわれるものによく似る」と評されているのである。

国冬と極められる古筆切は、『続拾遺集』の「伊勢切」を始めとして数多く存在している。中でも注目されるのは、国宝のものとは別種の、天理大学図書館やメトロポリタン・ミュージアム等に分蔵される『源氏物語絵巻』[21]である。天理本は飛鳥井雅経筆との鑑定を改めて鷹司基忠筆とするが、メトロポリタン本は国冬と鑑定されているのである。この他に国冬息の国夏とされる切も存するという。国冬とされる切を紹介された藤井隆氏は、「当時の能書家のものと思われ、世尊寺経尹、世尊寺定成などを当てたい所である」と述べておられ（『続国文学古筆切入門』和泉書院、一九八九）、この絵巻詞書が世尊寺流の特色を有していることを認めておられるのである。

仮名の「乃」で比較する限り、長門切のABC三手とこの源氏絵巻詞書の手との共通性は薄いが、書流と時代の観点から見れば、長門切を国冬と極めたことも、それなりの蓋然性を有していることが判るのである。

猶、国冬筆の歌集奥書とは、『日本書流全史』の図録編の世尊寺流の見本として掲載されているもの（四八六）であり、『古筆学大成九』に「詞花和歌集切」としても見えている。永仁四年（一二九六）二月の「津守（花押）」の主が国冬と断定できる訳ではないが、初代古筆了佐の極札が存している。この詞花集切の本文の筆跡やこれとは雰囲気の異なる奥書の書風などから、国冬は世尊寺流の書き手と判断されたものであろう。

以上くどくどとした考証となってしまったが、長門切本が現在確認されている切の範疇では、三手の寄合書きであると考えられること、その三手は書風の共通性が高く、世尊寺流に属するものであることが明確となった。また三手の内では、巻一一の担当者が世尊寺家歴代の能筆の真筆資料と最も親近性を示すことも確認できた。

世尊寺家一一代の行房が著した入木道伝書『右筆条々』には、「一 書絵詞様」との項があり、「可為行也、以読安為先…」（斯道文庫寄託センチュリー文化財団本）等と記されている。絵巻の詞は、読みやすさを尊重して行書で記せと教えているのだが、それは世尊寺家の人々が絵巻の詞書を担当してきたこと示してもいるのである。行忠や伊兼筆の実例の存在がそれを証明していよう。長門切が世尊寺流の書風を示すのは確かであるので、その点のみにおいては、長門切本が絵巻詞書である可能性を否定しきれないのである。

五 「長門切本」は絵巻詞書か

長門切本よりもやや時代が下るものではあっても、行忠や伊兼の遺例は世尊寺家の絵詞書写の具体的なあり様を伝える貴重な資料であることは疑いない。書風だけでなく、書写の形式や、書物としての様子などを含めて、この二例と長門切本を総合的に比較して、長門切本が絵巻詞書として制作されたのかどうかの問題についての結論を導き出してみたいと考える。

貞和三年（一三四七）成立の『後三年合戦絵詞』の行忠が担当した下巻は、一紙の基本的な大きさが、四五・七×七五・〇糎程度であり、一紙に一四～六行で、一行一五字程度で書写している。源仲直担当の上巻は一五、六行・一七字前後、世尊寺

流の書風を示す持明院保脩が担当した中巻は一八行・二〇字程度である。巻毎の見た目の印象も随分異なるのである。

また観応二年（一三五一）成立の『慕帰絵詞』の伊兼が担当した巻一〇は、一紙の基本的な大きさが、三二・〇×四八・〇糎程度であり、一紙一五行で、一行一四、五字程度で書写している。こちらも巻毎に若干のばらつきがあるが『後三年合戦絵詞』程ではない。

これに対し、長門切本は、一紙が三一×四七糎程度で、一紙二二行、一行一九字前後で書かれており、また手が変わっても一行字数に変化はないようである。この数値だけを見ても、絵巻二点とは書式が随分異なっている。『源平盛衰記』に匹敵する分量を有する本文を、省略することなく書写するとなると、膨大な紙が必要となるので致し方ない措置とも考えられるが、書写の形式や態度が隔たっていることは確かなのである。

またこの二例に限らず絵巻の詞書は一般的に、繰り返し読まれたことによって生じたと思われる、数も多くて深い巻皺がしっかりと存在している。それに対して長門切は巻皺は若干存するものの、それほどはっきりしたものではないのである。このことからしてもやはり絵詞とは考えがたいように思われるのである。もし仮に絵巻の作成を意図していたとしても、絵と継がれることなく終わったために、伝来の過程での痛みが少なかったかとも考えられよう。

詞と絵とが交互にくる絵巻では、行の途中で文章が終わる箇所が存在するものである。室町期以降の絵巻では絵の前が散し書きで終わる事例も多いが、『後三年合戦絵詞』・『慕帰絵詞』では行の途中で終わる箇所を確認できる。巻子本の古筆切の場合は、切断箇所は思いのままであるので、途中で終わる箇所を省いた可能性は否定できないが、数多いツレでもその様な事例を見いだすことができない。この点でも、長門切本が絵巻詞書である可能性は低いものと考えられるのである。

長々とした考証の割には、藤井隆氏の説を若干補強しただけの乏しい成果であるが、界線の存在以外にもその証拠となる特徴を確認できたものと考えたい。

絵巻でないとの結論が、また新しい問題の出発点となることも既述した通りである。それではなぜ、この様な複数の世尊寺流の能書を集めて、読本系の長大な平家物語の立派な巻子本が制作されたのであろうか。この問題はなかなかに難題である。

承徳三年（一〇九九）写の真福寺本『将門記』や、鎌倉時代

の写と考えられる大福光寺本『方丈記』は、文学の範疇に属する散文作品の本文のみの巻子本として著名な存在である。これらは寺院写本であるので、僧侶の書写活動のあり方との関連で考える必要もあるかもしれないが、「記」の名称を有するものであることは注目できる。事実を記す文体として認識されるものであるならば、巻子装として制作されることもありえたとも考えられるのである。長門切本がどのような書名を有していたのかは不明であるが、本文的に関連が深い『源平盛衰記』が、やはり「記」という書名を有しているのが気になるのである。

あるいはまた、巻子本である『大鏡』の東松本や建久本（天理大学図書館蔵）と同様に、歴史物語的な作品として認識されて、巻子本として制作された可能性もあろう。

共々今は単なる思いつきに過ぎないが、今後そうした視点でも考察を続けていきたいと考える。

おわりに

断簡でしか伝わらない特異な書物の、本来の姿と性格を追求する試みは、実り少なく終わって、書風が世尊寺流であることを追認して、やや乱暴に三手に分類してみたことと、界線の存在の他に、書式や巻皺の様子等により、絵巻詞書とは考えがたいことを補強したにとどまってしまった。

今後は、藤井隆氏が「斯様に立派な本は、宮中、摂関、将軍など、当時一流の人の関係と見られる」（「平家物語異本「平家切」管見」）と述べておられるように、この本の制作の場を究明する必要があるのは言うまでもない。そのことはこのような早い時期に、『源平盛衰記』にも匹敵すると考えられる読本系の『平家物語』の本文が成立した秘密を解き明かすことにも繋がるはずなのである。

今は書風と界線の存在程度しか手がかりはないが、仏書や漢籍をも含めた総合的な調査や、あるいは『水原抄』かと考えられる「源氏物語古註葵巻」や、冷泉家時雨亭文庫蔵の『伊勢物語』等の巻子本を始めとする、装訂として極めて例外的な伝本を総合的に検討する試みなどの中から、その答えを求めてみたいと考える。

書道や書道史に疎いため、書風や筆跡の判定・認定などの誤りなども多いことを恐れている。各方面の御専門の方の御教示をお願い申し上げる。

〔注〕

（1）その特徴については、拙稿「書物としての平家物語」（『軍記と語り物』四九、二〇一三・三刊行予定）を参照いただきたい。

（2）二〇一二年八月三一日に國學院大學で開催された「公開シンポジウム：一三〇〇年代の平家物語―長門切をめぐって―」における、諸氏の発表資料も対象とさせていただきい。

（3）『古典籍と古筆切 鶴見大学蔵貴重書展解説図録』（鶴見大学、一九九四）「一〇七 異本平家物語断簡 長門切」解説では、これを二紙を継いだとするが、折目を継目と見た可能性が高い。

（4）藤井隆氏「戦記物語の古筆切について」（『名古屋市立大学教養部紀要 人文社会研究』一五、一九七一・三）、小林強氏「軍記物語関連古筆切一覧稿」（『龍谷大学仏教文化研究所紀要』四五、二〇〇六・一）、松尾葦江氏「「古筆切平家物語考証」序説」（『愛知県立大学文字文化研究所年報』二、二〇〇九・三）等を参照。

（5）注4所掲小林氏論文。

（6）制作年代や料紙高さ、呼称や所蔵者等の情報は、『特別展覧会絵巻目録』（京都国立博物館、一九八七）、宮次男他編『角川絵巻物総覧』（角川書店、一九九五）に拠った。「絵巻・絵詞」の呼称については両者で異なる場合もあるが、統一を図ってはいない。

（7）国文学研究資料館編『古筆への誘い』（三弥井書店、二〇〇四）に二葉、石澤一志氏他『日本の書と紙』（同、二〇一二）に一葉掲載。

（8）『明翰鈔』と『古筆類葉集』については、松本文子氏「〔翻刻〕『類葉集』と『古筆類葉集』―付 西尾市岩瀬文庫所蔵『明翰鈔』古筆関係部分」（『鶴見日本文学』一一、二〇〇七・三）を参照した。

（9）平藤氏の発表で、古筆了栄の筆跡と思われる「堯孝門弟周興」とする極札を有する切の存在が報告されたが、切の書き出しが記入されていない古いタイプの極札であるので、別の切のものが取り合わせられた可能性が高いか。猶「国冬」との異伝については後に検討してみたい。

（10）同家とその歴代については、小松茂美『日本書流全史』（講談社、一九七〇）、宮崎肇氏「中世書流の成立―世尊寺家と世尊寺流―」（『鎌倉遺文研究三 鎌倉期社会と史料論』

東京堂出版、二〇〇二）、高橋秀樹氏「能書の家」（『和歌をひらく二　和歌が書かれるとき』岩波書店、二〇〇五）等を参照いただきたい。

（11）（　）内の数字は掲出された名物切の数である。

（12）『日本絵巻大成一五　後三年合戦絵詞』（中央公論社、一九七七）を参照した。

（13）同絵巻については、『続日本絵巻大成四　慕帰絵詞』（中央公論社、一九八五）を参照。真保亨氏は「慕帰絵の成立」（『日本の美術一八七』至文堂、一九八一・一二）において、この識語が巻九の詞を担当した桓信阿闍梨の筆跡であることを指摘され、信憑性が保証されている。

（14）久保木彰一氏「合戦絵巻の詞書」（『続日本絵巻大成一七　前九年合戦絵詞　平治物語絵巻　結城合戦絵詞』中央公論社、一九八三）は、世尊寺流の特徴について、「世尊寺家の人々の遺墨は、筆線が変化に富み伸びやかで、運筆も柔軟性が豊か」、「世尊寺流の丸みのある払いや止めの終筆」等と整理しておられる。また橋本貴朗氏は長門切シンポジウムの発表「「長門切」に見る世尊寺家の書法」において、世尊寺家の書法の一端として「太線による意図的な連綿」を指摘しておられる。

（15）古屋稔氏「「後三年合戦絵詞」の詞書筆者と書風」（『日本絵巻大成一五　後三年合戦絵詞』中央公論社、一九七七）は、経尹・定成・行房・行尹・行忠等の筆とされる願文等を比較して、「ほぼ一定の書法を踏襲したものと認められる。が、始祖行成とはかなり趣を異にし、伊行とはきわめて共通性を有することから、前述尊円がいう五代定信を下限とする行成様と、おのおの共通性を多く具備する六代伊行以下を世尊寺様として切り離して考えてはいかがであろうか。あるいは伊行・伊経を過渡期と考え、世尊寺をはじめて家名とした行能以下を分けてもよい。つまり、世尊寺様という一つの定型化したスタイルが、この時点において見いだされたといえる」と整理しておられる。漢文の願文でも共通する書風があったことが認められているのである。

（16）『尊経閣叢刊　入木秘書』（育徳財団、一九三九）に拠り句読点・濁点を加えた。

（17）同本の寄合書きについては、拙稿「尾州家本源氏物語の書誌学的再考察」（『文学・語学』一九八、二〇一〇、一一）を参照いただきたい。

(18) 同氏「『平家物語』長門切の一伝存形態」(『汲古』四五、二〇〇四・六)。

(19) 『日本名跡叢刊四四 鎌倉 世尊寺経尹 西園寺実氏夫人願文 鎌倉 世尊寺定成 平行政願文』(二玄社、一九八八)に影印と小松茂美博士の解説がある。

(20) 『看聞日記巻五紙背文書』(吉川弘文館、一九八七)。猶、巻六紙背には定成和歌詠草六紙があり、『図書寮叢刊 看聞日記紙背文書・別記』(養徳社、一九六五)に巻五のものを含めて翻刻がある。

(21) 『日本絵巻大成二三 伊勢物語絵巻 狭衣物語絵巻 駒競行幸絵巻 源氏物語絵巻』(中央公論社、一九七九)を参照いただきたい。

【補記】 本稿は、平成二四年八月二二日に梅光学院大学で催された、軍記・語り物研究会大会の講演会における発表内容の一部に、大幅な加筆と訂正を行ったものであり、講演内容の復元ではないことをお断りしておきたい。シンポジウムの発表内容の利用を御許可いただいた上に、様々に御教示に与った平藤幸氏に心より御礼申し上げる。